ひろば

番外編　内輪でランチ

今日は、事務局の林敦子さんと富樫美穂さんと内輪でランチ。美味しいフレンチの店のランチは残念ながら満席、そこでランチは事務所でお弁当になりました。日民協ではいつも美味しいものにありつける。林さんは食べ物に実にうるさいのです。

事務所の左にある打合せ用の机には小ぶりの２段重ねのお弁当が。おっ、なだ万のお弁当。上段に煮染めや卵焼き焼き魚などがきれいに入っている。下段は春らしい豆ごはん。二つ並べるときれい。デザートはゆずのゼリー。林さんが出勤途中に買って来てくれた。センスがいいのである。大食いデブの私をさかんに気遣って「ちょっと少ないかしら」と林さんが繰り返す。

富樫さんは昨年10月に長男紡（つむぐ）君を出産。誰がつけたのかすてきな名前。２月から産休明けで出勤している。川口市も保育園不足で紡君は４月から入園がどうなるかわからない。今は「ポンコツババ保育園」に預けていると富樫さんは言う。「おばあちゃん保育」である。定年退職した富樫さんのお母さんは富樫さん宅に来てくれて、保育はもちろん家事も手伝ってくれる。「帰るとご飯ができている。」んだって。紡君はまだ５ヶ月なので泣いてうるさいこともあるが、たち歩きはしないので、お母さんでもなんとかなっている。「寝ているうちが花よ」と一応子育て経験者の私がえらそうに講釈する。

４月には「どんなとこでもいいから入れるのよ」と敦子さん。「今はポイント制だから、ポイントを稼がないと」。保育の必要性がポイントになっているらしい。収入やまわりのサポートの有無、等々が評価されるのだそうです。可愛い孫の入園で事情通の敦子さん。私は区役所に勤める娘の保育園親友に「孫もあそこに０才から入れたいよね」と言うと「貧乏なシングルマザーしかいないわ」と厳しく言われてしまった。

富樫さんは日民協の前はマンガの編集プロダクションに勤めていた。担当の漫画家に付いて入稿を担当する仕事は、時間も不規則、残業は当たり前の「ブラック」だった。日民協に来て、「すごく楽しいし、やりがいも感じている」。ストレスも減り、子どもを産むこともできた。お母さんも美穂さんを育てながら労働組合の仕事を定年まで続けた。富樫さんも頑張りたいと思っている。お父さんは山口の実家に戻り、農業をやりながら、たまに孫の顔を見に上京する。

富樫さんは、何か頼むと「はい、わかりました」と気持ちよく言ってくれる。なんともほっとする。メガネの奥のくりくりした目が印象的である。周りにいる会員はほとんど富樫さんの親世代である。それに一言多く、わがままなのである。「こいつ、いい加減にしろ」と言いたいときも多いと思う。そこをさらりと受け止めるところがすごいと、私は思っている。

敦子さんは美魔女で年齢など超越しているが、そろそろ自由な時間を楽しみたいと思っている。森先生が理事長を退任するときから「森林（森と林の）伐採してもらいたい」と言い続けてきた。富樫さんに加えてもう一人事務局に「やりがいがあり楽しい」と思って事務局支えてくれる人を入れたい。ここ数年ずっと探し続けてきた。手作りでハイクオリティーの法民を作り続けるにはどうしても人がいるのである。今でも１ヶ月の仕事のうち半分は法民の編集に費やされているという。法民は編集作業だけでなく、発送も外注にしないで一通一通にラベルを貼り、同封できるものはギリギリまで入れることにしている。労を惜しまない雑誌作りをしているのである。

書き手はもちろん読み手とも顔の見える関係を築いてゆきたいと思っている。美味しいゆずゼリーを食べながら、やっぱり話は法民と日民協のことになる。富樫さんが入れてくれたコーヒーを飲みながら、話は、彼岸へ行ってしまった方々の思い出話になる。法民はこの号で536号である。あと、６年と４号で600号になる。まだ富樫さんは37才である。頑張ってね。

（弁護士　佐藤むつみ）

※編集後記

例年より早めに訪れた春の気配にまんまとだまされ、季節早取りとばかり、重いコートを脱ぎ捨てたものの、夜風の冷たさに思わず身を縮じこませています。三寒四温、ジグザクしながら、やがてサクラ咲く日々が来るのでした。慌てない、あわてない。

それにつけても、相変わらず冷たい風が吹きすさぶ国会。重税反対、ウソとごまかしを許さない、辺野古の海に土砂を入れるな、原発の再稼働止めよの声で包囲したいものです。すべての人に、本当の春がくるように…。　（林　敦子）